

社会基盤整備に伴う地域社会への影響分析 —近代における足利市の橋梁を対象として—*

A Study on Influence Analysis to Local Society According to Infrastructure Equipment
—For the Bridge in Ashikaga of Modern Ages—

深沢 真吾** 福島 二郎*** 中川三朗****

By Shingo FUKASAWA Jiro FUKUSHIMA and Saburo NAKAGAWA

わが国の地方都市における社会基盤施設は近世以降の伝統的産業の確立と、その後の近代における明治政府が推進した政策により整備・形成されてきた。特に、政府の方針とそれに対する地域の受容動向がその整備と形成に大きく関わっており、地域の受容動向としての人的評価が重要であると思われる。そこで、本研究では足利市を事例として、特定する人物に焦点を当て、その人物の意向と動向について調査を行う中で、社会基盤形成および地域社会発展との関わりについて分析を行った。対象とした社会基盤は橋梁とした。その結果、個人の能力も重要であるが、その力を有する個々の交流によって生じる結束力の大きさが、社会基盤の早期の整備を可能としただけでなく、地場産業や地域文化の成熟の増進に寄与したことが確認された。

1. はじめに

わが国の地方都市に見られる社会基盤の形成は、近世以降の伝統的産業によって整備発展してきた。なかでも社会基盤が地域経済に及ぼした影響は、都市形態としてその特徴に現れていた。しかし、封建社会制度からの脱却による国家主義思想や資本主義経済を目指した明治政府の政策である富国強兵や殖産興業は、各都市の発展に寄与する反面、都市が持つ固有性の減少を促進し、多くの都市で画一的な都市形態の整備が実施されたといえる。

政府政策の1つである伝統的産業の発展と保護政策に合致して都市整備を実施した地方都市は、政府の強力な指導と経済的援助により社会基盤整備が実施され、都市経済の発達はもとより伝統的産業の隆盛に大きく寄与したものと考えられる。

その地方都市の1つに本研究の対象地域である栃木県足利市がある。関東平野の北部に位置し、市の北部は足尾山地が広がり、中心域には北西から南東へかけて利根川水系渡良瀬川が流下する内陸地であり、明治以降両毛機業産地における主要地域の1地域であった(図1)。

足利の織物産業の歴史は古く、奈良平安時代にはすでに朝貢として用いられていた経緯があり、中世までは貢物や贈呈品として重要視され、近世以降は商品として扱われてきた。また、近世以降の生産体系は、問屋制家内

(手)工業、工場制手工業ののち、欧州の産業革命の影響を受けて工場制機械工業への早期対応により産業の近代化が成立している。

足利における織物産業に関わる研究は、経済史や地域史そして地理学的な視点から多くの研究がなされてきた。また、織物産業の隆盛に寄与した特定人物や社会基盤整備史も研究が行われている。しかしながら社会基盤整備が、その地域に与えた直接的な影響や特定人物が社会基盤整備について考えていたことや行動したことにおける検証や分析はあまりなされていない。この様に社会基盤整備に対する特定する人物の意向や動向の分析・検証から、地域に及ぼした影響を考察していくことが重要であると考えている。

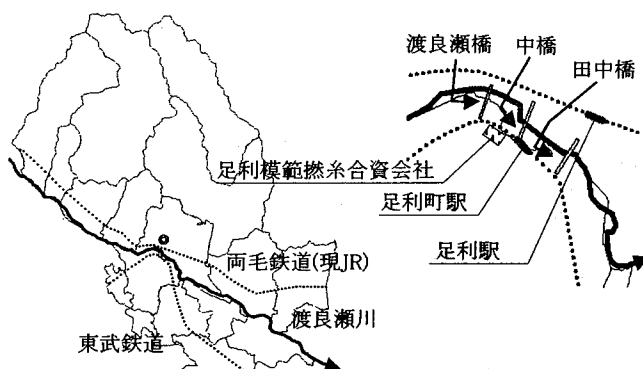


図1 対象地域と社会資本の位置関係

注) GISソフトを用いて著者が作成

*Keywords ; 足利織物史 渡良瀬橋 中橋 近藤徳太郎 荻野萬太郎

連絡先 〒326-8558 栃木県足利市大前町268-1

Tel 0284-62-0605 Fax 0284-64-1061

** 学生員 足利工業大学工学部都市環境工学科

*** 正会員 足利工業大学工学部都市環境工学科助教授

**** 正会員 工博 足利工業大学工学部都市環境工学科教授

2. 本研究の意義と位置付け

(1) 本研究の意義と方向性

本研究の意義とするところは、地域計画学の計画手法

を提案する上で、土木遺産や産業遺産などに関わる要素について土木史的な視点から考察を行い、その考察から把握できたことを用いて、地域における計画手法の提案へどのように活用または応用できるか試みることである。このような経緯を踏まえ、地方都市を構成する要素について着目すると「地理・風土・慣習・宗教・規範・風俗・教育・社会基盤・産業施設・商業施設」など多種多様な要素が存在し、何らかのつながりがあると想われる。これら多数に存在している要素のうち、都市の発達に関わる要素について土木計画学的な視点から抽出し、体系化を試みている過程であり、先に述べた地域風土や宗教など人間に直接関わりのある要素の集まりを非物性的な側面（ソフト面）とし、社会基盤や産業基盤などの土地利用や地域計画など人間が生活する上で関わる要素の集まりを物性的な側面（ハード面）として大別している。

そして、側面を構成しているそれぞれの要素から得られる結果から、地域社会へ及ぼした影響について検証と考察を行うことが本研究の目的である。

本研究では、物性的な側面（ハード面）を構成する要素の1つであると考えている「社会基盤」のなかでも橋梁建設を要素と仮定し、非物性的な側面（ソフト面）では、社会形成に寄与したと想われる「人物動向」を要素と仮定してみた。具体的には、ハード面に含まれる要素は渡良瀬橋と中橋で、ソフト面に含まれる要素は近藤徳太郎と荻野萬太郎とした。

また、既往研究の1つである福島二郎らによる『足利織物業の工場制機械化工業の変遷とその影響に関する一考察』¹⁾は本研究が土木史的な視点から検証する際の基準の1つを占めている。

（2）本研究における社会基盤の定義

Infrastructure は Infra-が下・下部・内核などの意味を有し、structure には構造・組織・体系・構造物・建造物などの意味を有する。これらを介して社会基盤または社会資本と訳されている。中でも、生活に関わる基盤（住宅・上下水道・ライフライン・学校・病院など）や産業に関わる基盤（工場・商業施設・漁業施設）があり、共通するものとしてエネルギー・通信・交通（道路、鉄道、空港、港湾など）が挙げられる。このうち、本研究で扱う橋梁については、共通性が高いため社会基盤とし、地場産業に強く関与しているものを産業基盤と定義する。なお、文章標記では混同を防ぐため統一して社会基盤と標記する。²⁾

（3）既往研究との位置付け

足利地域の織物業に関する研究は、荒川宗四郎が1902年に行っている。荒川は『足利織物沿革誌』³⁾足利織物の起源とその発展過程を詳述し、近代以降における生産体系と流通形態について整理した。その後、入交好脩・工藤恭吉・市川孝正ら早稲田大学経済史学会による『足利織物史』⁴⁾が編纂されると、織物経営の形態や生産構

造における技術進展の状況、また織物業の組合組織に関する歴史の変遷など、足利織物業の体系的ととりまとめられ、経済史的な分野からの研究が行われた。

1977年の『近代足利市史』⁵⁾の編纂なかで、地方産業史として取り上げられ、その翌年には同市史編纂委員であった日下部高明が、地理学的な視点から近代地方史に対する考え方や取り組みかたについて研究しており、地理学的試行を行っている。⁶⁾

この様に足利織物業に関する研究は、経済学や地理学的な視点とそのほとんどを占め、工学分野の中でも土木計画学的な視点からの研究は、あまりなされていない。

3. 足利における織物史

（1）特産としての価値

足利の織物の発祥は『足利織物沿革誌』によると（『延喜内蔵寮式』、『倭名抄』、『神鳳抄』の文献より）、足利郡・梁田郡の織物が朝貢として献上されており、奈良平安時代には織物が贈与のために生産されていた。また、『郷土史辞典栃木県』⁷⁾によると、足利織物の文献初出は『続日本紀』のなかで、梁田郡深川郷調布として東大寺に納められている。『徒然草』^{註1)}によると、鎌倉時代の幕府執権へ贈呈品として用いられていたことがわかる。

（2）産業としての成立

江戸時代1646(正保3)年に桐生織物市が設置されると、これを経由して足利織物は全国へ販売され、地場産業として成立しはじめた。また、1645(承応3)年になると、足利新田町に非公認の織物取引場が発生するなど、足利織物の需要の多さが確認できる。正式に市場が開設されたのは、1861(文久元)年であった。

この様に織物が地場産業として発達した背景には、足利の地理的特性と生活様式が強く関係してくると考えられる。1836(天保7)年『機屋共始末書付』¹⁾によると、

上州山田郡桐生領54ヶ村、並隣国野州足利辺者、都而山間之谷々にて、田畑多く、其上砂にて農業不利之場所故、百姓渡世難儀に付、往古より銘々農業之暇、蚕飼いたし、または、紙を漉、絹を織り作業仕来り

と記されており、都市部から山間部にかけて谷が続いていること、古くから農業が営みにくい地域であること、生活を助長するために工業（製紙、撚糸、織物）を実践してきたことが伺える。以上のことから食料生産としての農耕は実施されていたが、生活手段は農業よりも工業が重要視されていたといえる。

（3）地場産業としての盛衰

幕末の騒乱期には既に産業として確立されており、この時期は織物業の生産形態に変化が見られる。これは従来用いられてきた「腰機（または地機）」に代わり「高機」が1738(元文3)年に西陣から桐生へ移入され、天明期

(1781～1788年)に桐生からの影響を受けて足利へ普及した。さらに、明治維新を経て、機業家(元機や織元)の資本投資による工場の設置とそれに伴う生産構造の変化が、工場制手工業(Manufacture)を成立させた。そして、1878(明治10)年に東京で開催された第1回勸業内国博覧会では機業家5名がジャガード織機(写真1)を購入したことで工場制機械工業が成立した。

(4) 需要の対応と品質管理

これら幕末から明治初期における織物生産能力や生産量に対する需要が生じたかについては、江戸時代に郵便物を取扱っていた飛脚問屋と、江戸時代に整備された陸路よりも優れた交通機能を有する航路が大きく関係している。

郵便物の輸送を担っていた飛脚問屋が、足利織物の受注を受けたことにはじまり、やがて全国の織物問屋から織物の注文を取り次ぐことになった。この行為を専業とした織物買次商(のち買継)が登場してくる。また、渡良瀬川の舟運は、1624(寛永元)年に百姓忠兵衛が河岸問屋を開設ことにはじまり、1645(正保2)年に公認されている。この舟運の河岸(北猿田河岸; 現足利市猿田町)から、利根川経由して江戸へ到達するまで37里2日の行程であった。⁸⁾このような需要を知ることのできるソフト面と、輸送路の確保というハード面が存在したことで、足利織物の需要と供給は均衡を保つことが可能であった。

明治末期頃には、国内向け大衆用の平織り先染めの絹綿織物、いわゆる銘仙が登場した。^(注2)一方、江戸初期から市場が設けられていた桐生では紋織り、桐生お召しが生産されていた。そして、第一次世界大戦(1914～18年)の未曾有の好景気を受けた足利銘仙は生産額が激増したが、悪粗品も増加し、ついには小売屋の店頭に「足利物扱い申さず候」などの掲示がされた。^(注3)

1927(昭和2)年に創立された足利銘仙会は、生産技術と品質の保証、流行にさきがけた銘仙づくりを機業関係者が一丸となって取組み、京都の盛奨会によって認められたものが足利本銘仙である(写真2)。

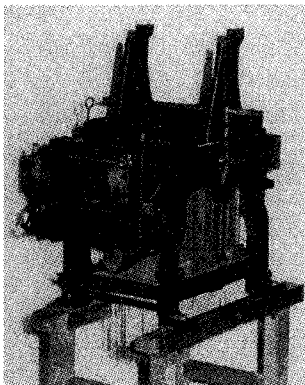


写真1 ジャガード織機

注1)京都文化博物館会館記念特別展冊子『気球があがった』より転写



写真2 足利銘仙

注2)平成17年8月 水彩画を撮影

4. 殖産興業政策と社会基盤施設

(1) 政府政策による模範工場の登場

殖産興業推進のために組織された勸業機構(中央官省)がある。勸業部門の管掌は新設された工部省(1870(明治3)年)が担い、その後、内務省(1873年(明治6)年新設)、農商務省(1881(明治14)年新設)と引き継がれた。この政策は、国内産業の中でも紡績・製糸業を育成と保護をすることで、輸出増進・輸入防退を計った。そのため、官営模範工場設置や欧米の最新機器の貸与など、多くの国家資本が各地に投じられるとともに、「勸業博覧会」や「共進会」を実施することで国内産業の振興や底上げも行っている。

製糸業の官営模範工場としては1870(明治3)年に富岡製糸場が設置され、紡績業としては1872(明治5)年から1881(明治14)にかけて境紡績所・広島紡績所・愛知紡績所が設置された。この官営工場に対し、民営工場も設立されている。

足利模範燃糸合資会社(写真3)は、1903(明治36)年に資本金400万円で設立された半官半民の会社である。政府は機業産地でかつ組合を有する各地から、機械生産による近代化を希望する京都・福井・富山・桐生・足利・米沢の6地域を選定した。設立時の役員は社長; 木村浅七・取締役; 秋間為八他8名・監査役; 荻野萬太郎他6名であり、機業家や銀行頭取などがその責務を負った。^(注4)



写真3 足利燃糸模範工場

注)左:参考文献9)41ppより転写 右:大町雅美『栃木の百年』、1986より転

(2) 政府政策と交通網の整備

江戸を中心とした大消費地への輸送を容易にした舟運も、輸出用絹製品の輸送量への対応能力の限界と鉄道の進出によりその役目を終えることとなった。1883(明治16)年に日本鉄道会社が立案した第二区線計画立案に対し、足利を代表する機業家たちは、熊谷・足利・栃木を通過して宇都宮に到達する案を推して株金募金が行われている。しかし、この案は陸軍の反対により実現は果たせなかった。^(注5)その後、機業家(買継商)による鉄道建設運動が展開され、1886(明治29)年に小山・足利・桐生へ通過する両毛鉄道株式会社創立願書の提出が栃木・群馬両県知事へ提出されると、翌年同会社が発足し、社長; 田口卯吉・副社長; 4代目木村半兵衛・取締役; 小松彰他3名・検査委員; 安田善次郎他2名であった。1888(明治21)年に両毛鉄道(現 JR 両毛線)小山―足利間が開通すると、小山から日本鉄道(現 JR 東北本線)により東京へ連絡された。この鉄道は機業家が生産品の輸送目的として整備された産業自生鉄道である(写真4)。

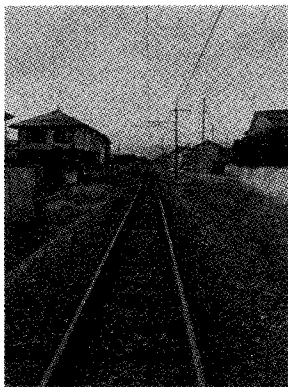


写真4 両毛鉄道(現 JR 両毛線)

注)平成18年3月撮影

(3) 地域社会の動向による社会基盤整備

a) 足利織物講習所の創立と近藤徳太郎

1885(明治18)年に足利工商会の経営による足利織物講習所(写真5)が創立され、10年後の明治28年に栃木県へ移管されて栃木県工業学校が開校した。染織科100名、修業年限は3年であり、機業改善と工程の近代化の推進に寄与していく教育機関の成立である。1910(明治43)年9月8日には、ときの皇太子(大正天皇)が行啓されて授業を台覧し、1934(昭和9)年11月16日には、昭和天皇が行幸されて生徒実習を天覧されるなど、興国の要の1つとして重要視されていたといえる。1946(昭和21)年に創立50周年を迎え、23年の学制改革により新制高等学校となり、足利工業高等学校と改称され現在に至る。

この教育機関がその後の地域社会貢献に大きく寄与することとなるが、その中心人物の1人に初代校長である近藤徳太郎(写真6)がいる。

1859(安政3)年に京都中京東洞院六角通の天台宗紫雲山頂法寺内に生まれ、寺は華道「池坊」の家元であり、父春彦は華道を志し、母すえは下京の染物業の家の出身であった。1872(明治4)年に京都中学校へ入学すると、翌月には仏学校へ転校し、レオン・デュリー夫妻に指導を受けた。1875(明治8)年に師の転勤に伴い、京都府命により東京勸業局試験場で製糸・撚糸・養蚕の研修に従事した。1877(明治10)年に京都フランス勸業留学生として渡仏し、5年後に帰国し、京都府御用掛・織殿長に就き、農商務省の御用掛も兼務した。その後、京都織物㈱へ移り、同社の経営不振の責任を受け退社し、川島織物㈱へ入社し、工場の近代化に尽力する。また、第三高等学校および同志社政法学でフランス語講師兼任するなどして明治28年に栃木県工業学校長として足利へ赴任した。⁹⁾



写真5 織物講習所

注5)参考文献9)より転写

(足利郷土資料研究所蔵)



写真6 近藤徳太郎

注6)足利市立教育研究所 WEB

『のびゆく足利かつやくした先人たち』より

b) 渡良瀬橋・中橋と荻野萬太郎

1895(明治28)年9月に、足利梁田郡有志256名が連署した陳情書を栃木県知事佐藤暢宛に提出をはじめとする建設推進のための運動が起こっている。同年12月の県議会で建議案が可決され、足利郡からは八千円の寄付(内足利町が五千円負担)を行い、1902(明治35)年7月に竣工した。¹⁰⁾その後、混合木橋形式であるため腐朽が目立ち、数度の修繕がなされ、1917(大正6)年に架け替えが行われた。その構造形式は木造のプラットトラスであった(写真7、写真8)。¹¹⁾

今日に架設されている鋼製ワーレントラス構造の渡良瀬橋は、1934(昭和9)年の春季陸軍特別大演習および昭和天皇の地方行幸の折、御渡御にあわせて大改修されたものである(写真9)。¹²⁾なお、橋台は明治期に建設されたものが今日でも利用されている。

一方、渡良瀬橋下流約450mに中橋がある。1907(明治40)年に東武鉄道足利町駅(現東武伊勢崎線足利市駅)が開設され、5年後の明治45年に東武鉄道が、足利町議会に足利町駅より足利町二丁目に通じる橋梁の新設出願を提出して、1913(大正2)年に当時の駅正面玄関前に存在した舟橋式の仮設橋が中橋の前身である。この舟橋は、東武鉄道の私費を投じて建設された(写真10)。¹³⁾しかし、渡良瀬川の増水時には橋の一時的な撤去により使用ができない場合や車馬の通行は不可能なことから交通機能上の問題が生じていた。

渡良瀬橋の腐朽に伴い架け替えの必要性が迫られた機会を利用して、通二丁目有志田村彦七、石関嘉十郎らが中橋の架設希望運動を実施している。1930(昭和5)年9月に足利市長大給新および市議会議長荻野萬太郎が出県させられ、栃木県知事原田維織との内談を持ち、その後の1931(昭和6)年の通常県議会を経て可決し、1936(昭和11)年に竣工した(写真11)。¹⁴⁾

2橋梁に関する人物として、特に注目すべき人物は荻野萬太郎である(写真12)。1872(明治5)年足利町通三丁目の父峰八の末子として生まれ、兄が急死すると、1885(明治18)年に本家荻野由兵衛の養子となった。織物講習所第1期生として卒業し、同期生には市川安左衛門・岩本良助(機業家)・川島藤左衛門(県議、機業家)・関田応助・長谷川作七(機業家・県議)原田政七(町議)¹⁵⁾などがあり、その後の人生において職業や社会活動を通じて互いの交流がみられる。

また、1892(明治25)年に荻野ら9名を発起人とした足利友愛義団が結成され、幹事長となった。19歳のときである。¹⁶⁾この組織の主たる目的は「交誼を厚くすること」、「同志の決断を図ること」であり、織物産業に従事する機業家の交流や情報交換の基盤を築いたといえる。また、足尾銅山の鉍毒被災者の救済や日清戦争への徴兵者送別・歓迎、家族への慰問など社会情勢に対して地域での取組みが行われている。¹⁷⁾

さらに、1895(明治28)年に第四十一国立銀行頭取であった岩下善七郎の薦めで入行し、約半年の期間を経て足

利銀行を創設するに至った。そして、1899(明治32)年足利町が郡になると郡会議員に選出されるとともに、1903(明治36)年に足利町会議員に当選するなど、政治にも関わっていた。



写真7 建設中の渡良瀬橋(初代)

注)三田忠夫:『ふるさとの思い出 写真集明治大正昭和足利』、14pp. 1981より

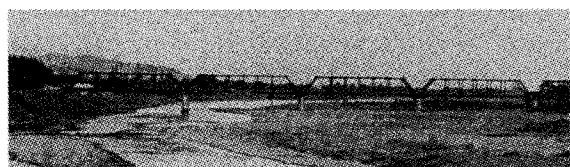


写真8 架替えられた渡良瀬橋(2代目)

注)雪輪会発行絵葉書『足利風光その七 渡良瀬橋 俳句:東洋城』より



写真9 今日の渡良瀬橋(3代目)

注)平成2年5月撮影 (福島二郎氏提供)



写真10 東武鉄道が架橋した舟橋(中橋の全身)

注)注)三田忠夫:『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和足利』、16pp. 1981より

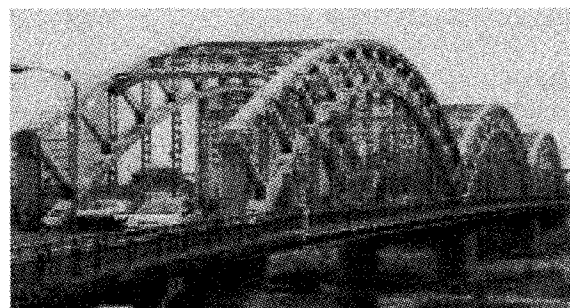


写真11 今日の中橋

注)平成17年4月撮影



写真12 荻野萬太郎

注)注)足利市立教育研究所 WEB『のびゆく足利かつやくした先人たち』より引用

5. 対象資本の位置関係についての検討

(1) 渡良瀬橋の橋脚の位置について

渡良瀬橋が架設される1902(明治35)年以前の渡良瀬川の交通は舟運であり、足利の地域で初めて建設された渡良瀬橋の橋脚の位置は、左岸が通四丁目、右岸が田中町である(図2)。

a) 左岸橋脚の位置と織物業について

左岸(河北)側が、足利の織物製造の中心的な場所であった。従って、織物業の職種別にみた分布図から製造に関わる分布量を等値線で示された図から渡良瀬橋の位置について検討を行う(図3, 図4)。

図3, 図4から、渡良瀬橋が上買場と下買場のほぼ中央に位置していることが判かる。また、等値線が高い3拠点は、織物の製造が中心となっている位置であり、渡良瀬橋からみて最遠地が2拠点存在し、最近地が1拠点である。最遠地の2拠点から渡良瀬橋までの距離はほぼ同距離にある。即ち、織物の製造が中心である3拠点から渡良瀬橋までの位置関係について、距離的な偏差はないといえる。

b) 右岸橋脚の位置について

右岸(河南)側の土地形態について荻野は「東武足利町駅辺りに小高い雑木林や大小の沼地があり、昼間でも淋しいところであった」^{18), 19)}と述べていることから、居住空間の形成と、綿花や養蚕などの生糸の原材料の生産が可能な土地利用が行われていた場所に右岸橋脚が建設されたと考えられる。

架設後の社会基盤整備をみると右岸橋脚から約100mの位置に足利燃糸合資会社が設置され、約450mの位置には東武足利町駅が設置されている。

即ち、兩岸の織物産業に関する土地利用形態から現在の位置に選定されたと考えられる。

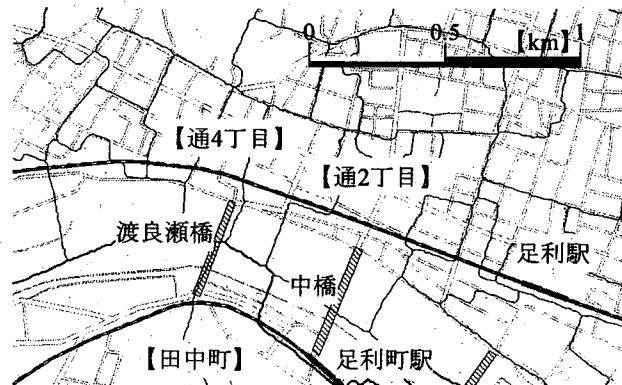


図2 町丁別に見た橋梁の位置

注)GISソフトを用いて著者が作成

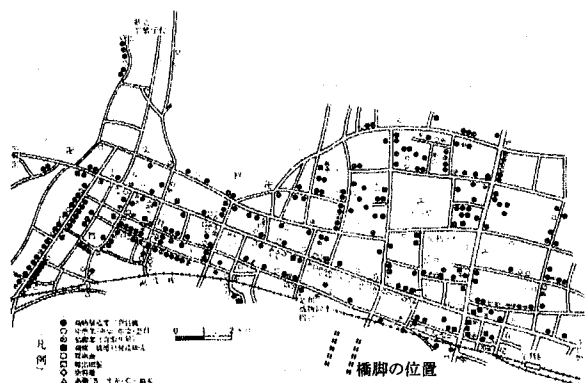


図3 足利町の織物に関わる職種の分布(明治40年)

注)日下部高明が『明治40年「栃木県営業家案内」』を基に作成のものに加筆

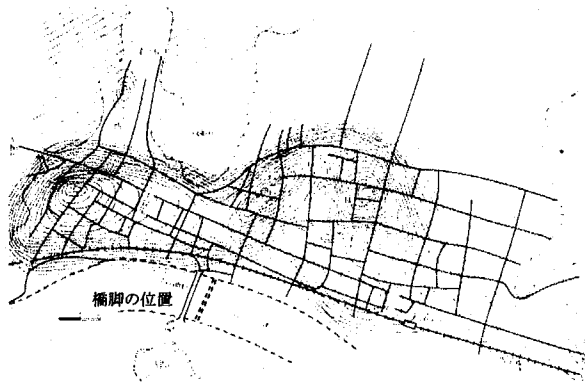


図4 織物製造業の分布に対する等値線図(明治40年)

注)図3の等値線化もの(日下部高明作成) それを基に加筆

(2) 中橋の位置について

中橋の位置は東武足利町駅の設置に伴い、東武鉄道側が明治45年に足利町へ渡良瀬川に架橋建設願を提出して建設された舟橋型式の仮橋が始まりである。この仮橋は駅北側の改札口の正面に設置されていた。また、駅舎の設置時は南向きに建設されたが、のちに北向きへ改築されていることから¹⁹⁾、左岸側に居住する人や織物業に関わる物資の輸送を確保するねらいがあったと考えられる(表1)。その後、昭和5年の通常県議会で架橋可決が確定すると、舟橋より上流に隣接した場所に選定された。

中橋の橋脚の位置は、左岸に通二丁目、右岸に田中町であり、交通機能の確保と山辺地区の地域開発に大きく寄与したものと考えられる。¹⁸⁾

表1 東武足利町駅開通後の旅客と貨物の収入

調査年次	明治40年9月	明治41年3月	明治41年9月	明治40年9月	明治41年3月	明治41年9月
駅名	旅客収入			貨物収入		
北子住	12,499	10,923	11,850	1,929	2,854	519
越ヶ谷	9,261	9,713	10,526	1,052	429	375
粕壁	9,412	8,435	9,368	884	1,282	1,480
杉戸	6,199	5,499	5,988	1,782	2,876	2,449
加須	9,713	8,385	8,661	984	1,087	1,099
久喜	6,751	5,577	5,242	1,703	3,342	2,547
羽生	6,375	6,150	6,388	1,260	2,182	1,730
川俣	6,217	1,679	1,600	713	175	471
館林	2,328	9,236	10,769	384	3,017	4,499
足利町	5,886	16,388	19,164	2,923	6,351	6,721

注)東武鉄道百年史 176pp 表1-2-5より

6. 人物の動向についての検討

(1) 近藤徳太郎の意向と果たした役割

近藤徳太郎が足利へ教育者として赴任するまでの岐路を分けると①中学校に設けられた欧学舎により仏語へ志

学し、師レオン・デュリーとの出会い渡仏後も師事したこと、②デュリーが帰国する際に、京都府へ仏留学生を要請し、近藤他7名が化学染色技術製陶術・醸造法・機械学・鉱山学・法律学・歴史学を修得する機会を得たこと、③帰国後、公務員や教員^{注6)}と民間企業の技術者^{注7)}として織物に携わったこと、④第三高等学校および同志社政法学でフランス語講師をしたこと、の4つに分けることができる。さらに、近藤の岐路についてまとめると、第一期は織物技術の積極的吸収と実践、第二期は実践で痛感した教訓と語学教育を通じての教育機構の必要性、特に近代工業化へ向けた工業教育の新興の重要性をはかることを考えていたといえる。

このような経緯を踏まえ、足利へ赴任した要因を日下部高明は①京都の保守性的慣習が新しい知識・技術導入の阻害要因となったこと、②織物の歴史がある足利が、新しい知識・技術の導入に積極的であったこと、③政府の動向と三井呉服店の協力が存在したこと、と仮説を立てている。²⁰⁾これに加えて社会基盤整備^{注8)}と織物の近代化をはかる機業家の動き^{注9)}という2つ実績が関係していると思われる。

近藤が京都において従事した京都織物会社は、北垣府知事の主導で進められたが、本格的創業と明治23年の第一次恐慌が重なり、過大な設備投資の責任・新技術に対する疑問・高給などの事由から、同会社株主総会の義を経て解雇されている。

足利においては、第一次恐慌の2年前に交通網の整備として両毛鉄道の整備がされ、荻野の同期生でもある市川安左衛門は、生糸絹の精練工場を同年に整備している。また、明治28年には荻野が足利銀行を設立している。以上のことから、社会基盤整備の実態と知識・技術を欲している足利の機業家や行政の動向が、近藤を足利へ呼び込んだ大きな要因であったといえる。

足利へ赴任したのち近藤が果たした役割を整理すると、1つ目に織物技術の近代化が挙げられる。これは、製織前の工程において力織機のない足利地方の織物の品質を向上するための目的として緊急を要しての実施であった。もう1つの役割として意匠図案の近代化であり、明治38年栃木工業学校内に設けられた栃木県図案調整所は、『図案は当分の内は無料を以て依頼者に交付す(栃木県図案調整規定で附則第十四条)』⁽²⁾として意匠図案を無料で交付している。

(2) 荻野萬太郎の意向と果たした役割

荻野萬太郎の岐路についてみると、①兄の急死による東京遊学の断念と織物講習所への進学、②岩下善七郎(第四十一国立銀行取締役)の推薦による国立銀行への入行、③足利友愛義団の創設、④国内織物需要の増加期における足利銀行の創立、⑤郡会議員の当選を経て、政治活動や他の政治家との交流が挙げられる。

織物講習所卒業から家業手伝いまでの時代区分を第1期とすると、この期間で織物産業の隆盛を持続させる手段を模索するとともに、普及や協働など参画できる環境整

備として、友愛義団を組織したと考えられる。

第2期の期間として、足利銀行の設立は、国内向け織物の需要の増加に対する機業家への出資の確保を目的とした地域経済の安定と今後の発展に寄与するであろうと、推測して改善した金融業務の円滑・効率化があったと考えられる。また、並行した政治活動は、社会基盤に見られる様な物性的側面の整備充実の手法としての活動であるといえる。

その過程で整備された社会基盤として、栃木県工業学校・足利銀行の創設(共に明治28年)・渡良瀬橋の架設(明治35年)・足利燃糸(資)合資会社(明治40年)・東武鉄道敷設および足利町駅設置(明治45年)・中橋の架設(昭和11年)であり、整備に大きく寄与していた。

7. まとめ

(1) 研究成果

本研究の成果として次のことが挙げられる。

a) 近藤徳太郎が地域に及ぼした影響

足利織物が近世以降地場産業として確立し、全国に販売されたのは江戸中後期である。その後、社会制度の革新と経済構造の変移に伴う社会情勢の変化への対応は、機業家(元機や買継)として成立していた人物たちの存在が大きく寄与していた。しかし、欧州に興った産業革命が各国へ及ぼした産業の近代化に対し、動力織機の導入など物性的な側面の整備はされていたものの、織物生産工程の近代化については対応できなかった。

織物生産工程の革新としての先見性を通じて、足利織物に及ぼした影響が、①生糸・染色・精練・燃糸技術の近代化、②工業教育機関の運営による地域に貢献できる指導者・統率者・技術者の育成と近代工業教育の確立、③意匠図案の無償提供による足利織物の銘柄の向上と確立である。

近藤が地域社会に及ぼした影響は、非物性的な側面を構成している要素をより成熟させたことに寄与した。

b) 荻野萬太郎が地域に及ぼした影響

明治維新以降、松方デフレや第一次恐慌の金融の不安定が招いた影響は、近藤が京都で体験した様に全国各地における社会基盤の整備を困難な状況下へと追いやることになっていた。足利においては厳しい環境下であっても社会基盤の整備が実施されている。^{注8)}^{注9)}しかし、大きな利潤を生む生産能力のない機業家たちの淘汰が進行した。

この様な経済環境のなかで育った荻野萬太郎が、地域に及ぼした影響は足利友愛義団による「人と人とのつながり、対話」空間の創造である。その活動を通じて風俗教育の改善・地域文化の普及・社会問題への対応がある。そして荻野自身が、他の政治家や機業家など異なる職種とのつながり役となって整備してきた社会基盤がある。

荻野萬太郎が地域社会に及ぼした影響は物性的側面を構成する要素の建設に寄与した。

(2) 考察

渡良瀬橋の形成は、渡良瀬川により分化された地域の連絡を容易にただけでなく、足利模範燃糸合資会社の位置決定に大きく寄与した。¹⁾ また、このような社会基盤の整備が新たな社会基盤の誘致や建設の起因となった。東武鉄道の路線の位置決定も足利模範燃糸合資会社が存在することが、最終的な決定へとつながった。逆に、渡良瀬橋との位置関係上の問題で中橋の架橋が遅延したともいえる。しかし、都市構造の整備や形成を実施して行く整備の循環が存在した。そして、これらの社会基盤の整備は、田中町をはじめとする山辺地区の開発や土地利用に大きな影響を及ぼしたという。

近藤や荻野の動向が地域社会へ及ぼした影響は、地場産業としての独創性と地域慣習や風土を形成する人間社会の環境を構成する上での先覚者であったといえる。

また、偶然的ではあるが、明治28年5月16日に近藤は教育機関である栃木工業学校の運営を任されると共に自らも教団に立っている。そして、同年10月1日には荻野は足利銀行の営業を開始している。この共通点について特別な関わりはなかったが、織物技術の近代化と織物環境の改善と基盤整備が同年に行われたのである。

彼ら個人の能力、特に強力な指導力や統率力なども重要な要因ではあったが、個々の交流によるつながりや対話などを介して得られた結束力など、人と人とのつながりや対話の存在したことで、早期の社会基盤の整備・地場産業や地域文化の成熟さを増進する大きな原動力であったにちがいない。

補 注

注1) 第二百十六段に『最明寺入道、鶴岡の社参の次に、足利左馬入道の許へ、先づ使を遣して、立ち入られたりけるに、(中略)さて、「年毎に給はる足利の染物、心もとなく候ふ」と申されければ、「用意し候ふ」とて、色々の染物三十、前にて、女房どもに小袖に調ぜさせて、後に遣されけり(以下省略)』とあり、毎年様々な色の足利の織物が献上されていることが記されている。

注2) 参考文献17) 47pp, 59ppに「京都にあつて着尺流通に君臨していた盛奨会がようやく認知してくれた「足利本銘仙」が「足利銘仙のスタートで(以下省略)」著されているが、(財)民族衣装文化普及協会編:『染めと織地域別辞典』, 2000.3や三省堂:『大辞林』による銘仙の定義から本稿では「銘仙」と記した。

注3) 金井好三郎が「あしかが文化三十周年記念誌(昭和53年第4号)」のなかで著した足利銘仙裏話に「一つの織物に執着がないから無責任になって、粗野乱造の結果扱業者からあきれるのであった。ある時集散地視察にいつて来た。報告によると九州のある小売店の店頭に「足利物扱い申さず候」と言う張り紙があるのを見たと言う